

## 2 お茶大の教育

### 1. 学部教育

#### 1) 教養教育(コア科目)／専門教育への評価

これまで受けた授業のなかで意味があった教養教育(コア科目)と専門教育の割合を尋ねた。2007年に実施された全国大学生調査コンソーシアム／東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」における全国平均は、教養・共通教育は4.39割、専門教育は5.85割であった。これと比較すると、お茶の水女子大学全体の平均は教養教育(コア科目)で5.4割、専門教育で7.2割と高めの割合であった。

学年別に見ると、意味があった専門教育の割合はとくに4年生で7.5割と高くなっている。学部別にみると、理学部が7.5割と他学部 비해高くなっている。学科別に見ると、意味があった専門教育の割合がとくに高かった学科は芸術・表現行動学科、食物栄養学科、化学科であり、平均して8割近くの専門教育に意味があると学生が考えている結果となった。

図表 2-1 これまで受けた授業のなかで意味があった教養教育(コア科目)と専門教育の割合(学部)

	合計				1年				2年			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	949	5.4	5.0	2.35	221	5.8	6.0	2.37	211	5.4	5.0	2.33
意味があった専門教育	947	7.2	8.0	2.23	215	7.1	8.0	2.57	211	7.1	8.0	2.27
					3年				4年			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育					216	5.4	5.0	2.25	301	5.1	5.0	2.40
意味があった専門教育					218	7.1	8.0	2.27	303	7.5	8.0	1.88

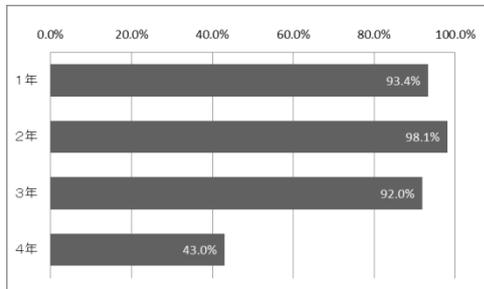
	文教育学部				理学部				生活科学部			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	438	5.5	6.0	2.41	247	5.3	5.0	2.34	264	5.3	5.0	2.27
意味があった専門教育	435	7.2	8.0	2.29	246	7.5	8.0	2.19	266	7.0	8.0	2.16
	人文学部				数学科				食物栄養学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	111	5.6	6.0	2.50	38	5.0	5.0	2.48	72	5.3	5.0	2.40
意味があった専門教育	110	6.8	8.0	2.48	40	7.1	8.0	2.66	73	7.9	8.0	1.89
	言語文化学科				物理学科				人間・環境科学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	152	5.8	6.0	2.49	46	5.2	5.5	2.40	47	5.3	5.0	2.36
意味があった専門教育	149	7.2	8.0	2.39	47	7.0	8.0	2.37	47	6.9	7.0	2.15
	人間社会科学科				化学科				人間生活科学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	128	5.3	5.0	2.28	47	5.7	6.0	2.15	145	5.4	5.0	2.19
意味があった専門教育	128	7.1	7.5	2.09	44	8.1	8.0	2.00	146	6.7	7.0	2.19
	芸術・表現行動学科				生物学科							
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差				
意味があった教養教育	47	5.1	5.0	2.25	52	5.6	6.0	2.29				
意味があった専門教育	48	8.1	9.0	1.81	52	7.6	8.0	2.06				
					情報科学科							
					N	平均値	中央値	標準偏差				
意味があった教養教育					64	5.0	5.0	2.37				
意味があった専門教育					63	7.5	8.0	1.90				

#### 2) 文理融合リベラルアーツ(LA科目)への評価

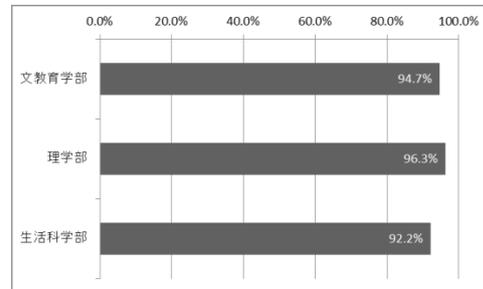
お茶の水女子大学は自然・人文・社会の3つの角度から多面的に学べるような「21世紀型文理融合リベラルアーツ(LA)」科目群を3年生(2010年度)が入学時(2008年)に開設した。LA科目を履修したことがあるかどうかについて学年別に見ると、1年生93.4%、2年生98.1%、3年生92.0%が科目履修経験があると回答している。LA科目が開設されて以降、4年生以外のほとんどの学生に何らか

の形で LA 科目を履修する機会があったと言える。4 年生を除き学部別に見てみると、文教育学部 94.7%、理学部 96.3%、生活科学部 92.2%と LA 科目を受講した割合に差はなかった。学科別に見ると、芸術・表現行動学科、食物栄養学科の比率が比較的低かった（9 割弱）ため、文教育学部と生活科学部の比率が理学部に比べて低くなっているのだと思われる。

図表 2-2 学年別 LA 科目履修経験

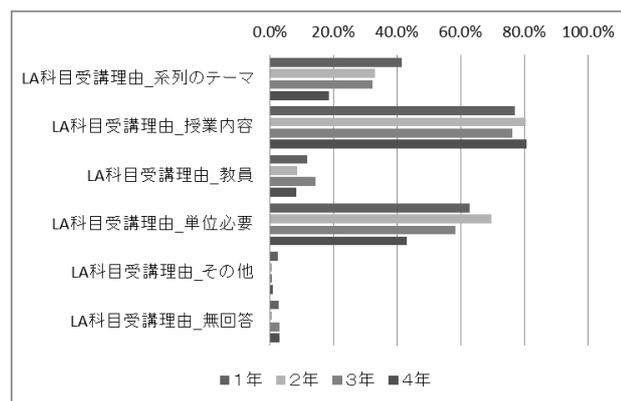


図表 2-3 学部別 LA 科目履修経験(4年生を除く)



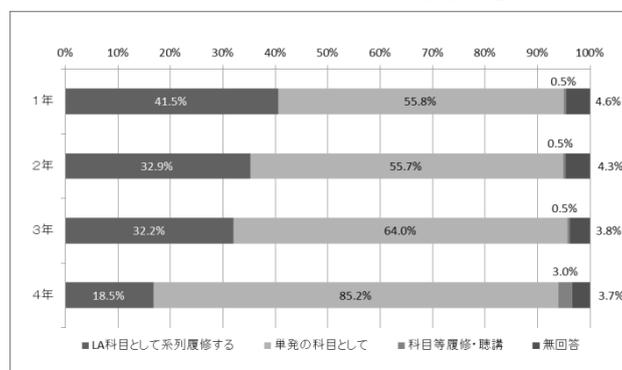
つぎに、LA 科目を履修したことのある学生に受講理由を尋ねたところ、1 年生では 41.5%の学生が系列のテーマに関心があるからと回答している。この傾向は学年進行とともに下がる。

図表 2-4 学年別 LA 科目履修理由



この質問と関連して、LA 科目の履修形態を聞いたところ、やはり 1 年生で「LA 科目として系列履修する」と回答した者が多く 41.5%であった。

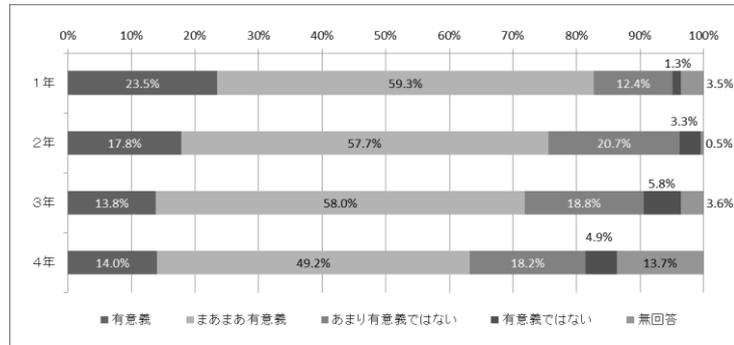
図表 2-5 学年別 LA 科目履修形態



図表 2-6 は、LA 科目のコンセプトである領域横断的な系列テーマという設定が役に立つ・知的好奇心を刺激されるような有意義なものであるかという質問の回答を学年別に見たものである。これもや

はり 1 年生で「有意義」または「まあまあ有意義」と考えている者の割合が高く、全体の 8 割を超えている。これも学年進行に従いその割合が下がっていた。

図表 2-6 領域横断的な系列テーマで設定されている LA 科目は役に立つ・知的好奇心を刺激されるような有意義なものだったか。(学年別)

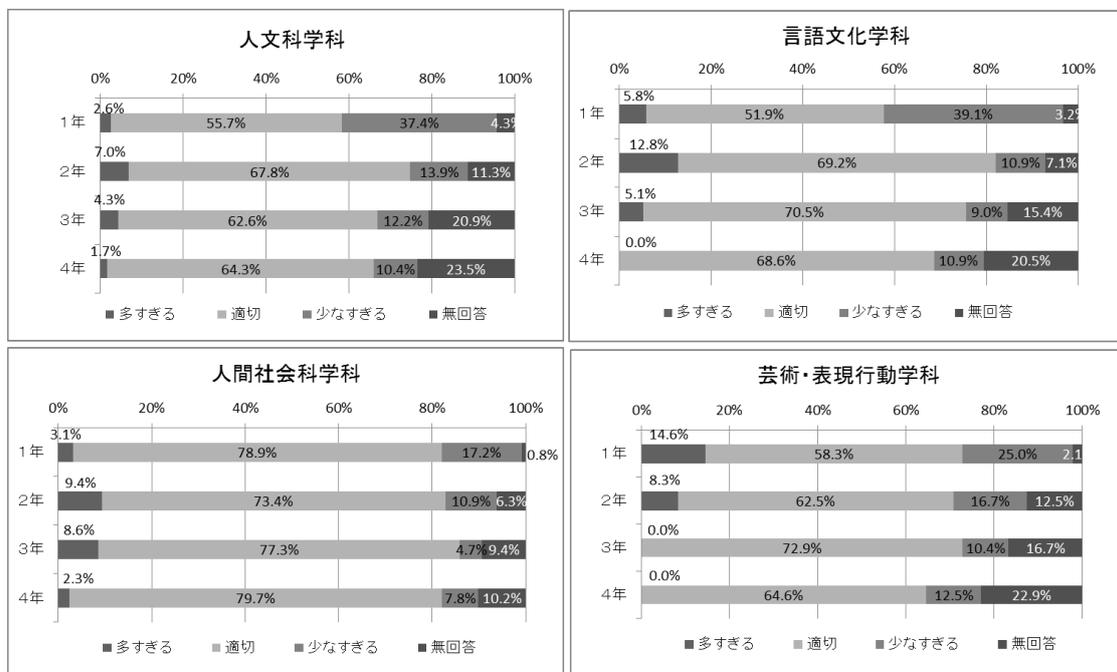


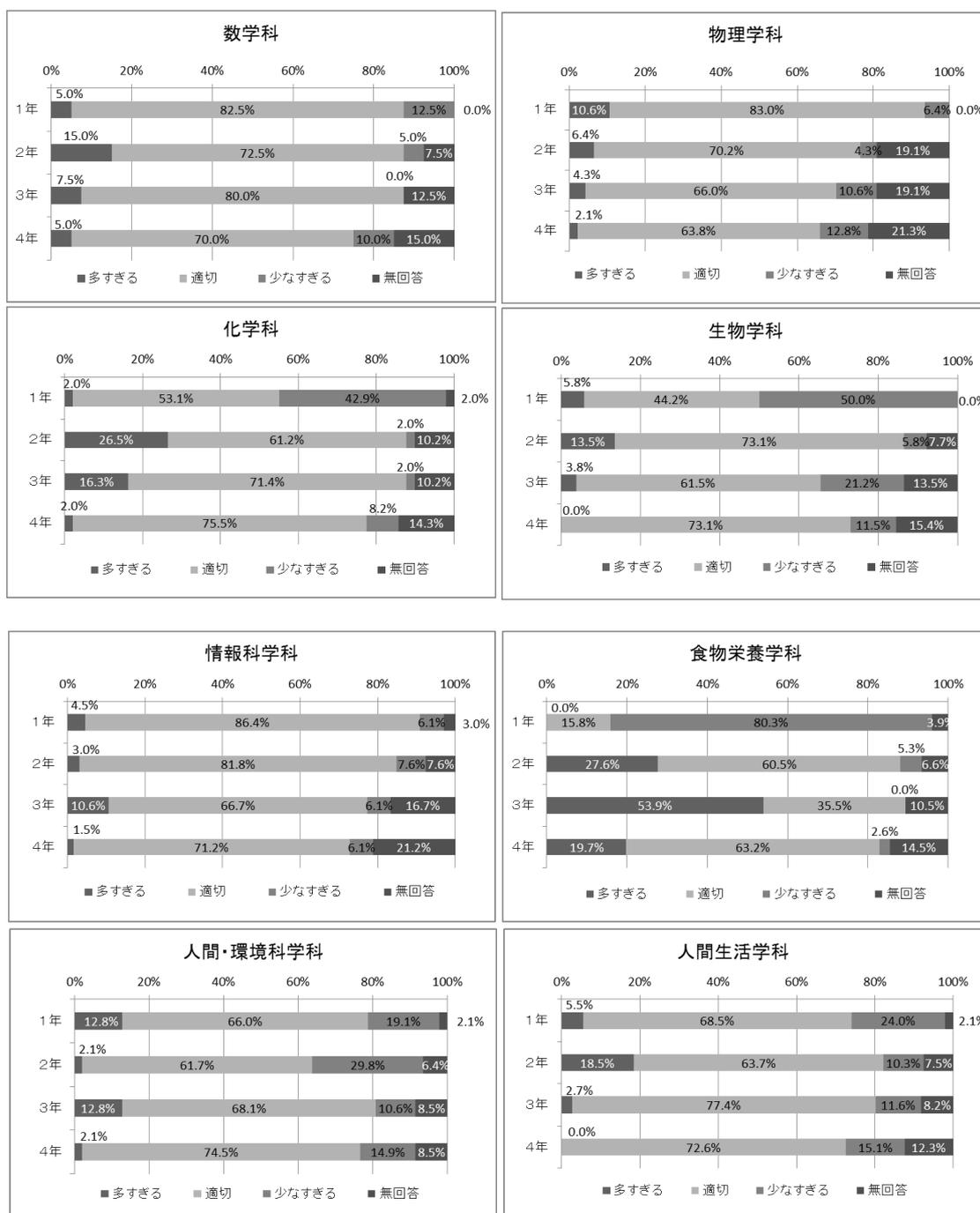
以上の結果から、文理融合リベラルアーツが 2008 年に始まってから系列履修する意義が徐々に広がってきたと言えよう。

### 3) 専攻科目への評価

各学年における専攻科目の履修学年配置が適切か否かの評価を学科別に表したのが図表 2-7 である。人文科学科、言語文化学科、化学科、生物学科、食物栄養学科で 1 年生における専攻科目が少なすぎると回答している者が多い。食物栄養学科では同時に 2、3、4 年時における専攻科目が多すぎると回答している者の比率が高い。

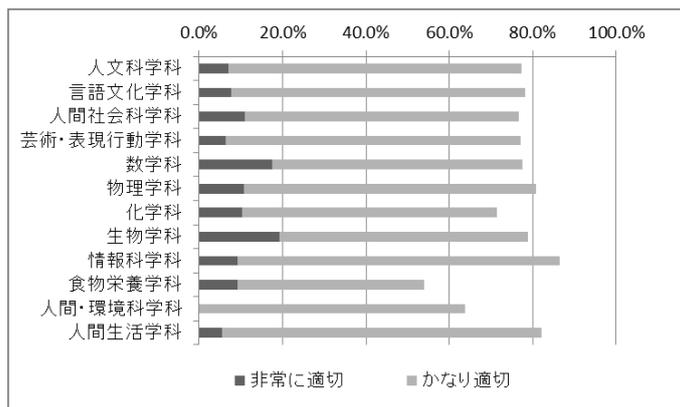
図表 2-7 専攻科目の履修学年配置の適切さ(学科別)





専攻している領域において必修科目、選択必修科目、選択科目の3つのバランスが適切かどうか評価してもらったところ、多くの学科で8割が「非常に適切だと思う」または「かなり適切だと思う」と回答している。しかし、食物栄養学科、人間・環境科学科、化学科でその比率は比較的少なくなっている。

図表 2-8 専攻領域における必修科目、選択必修科目、選択科目のバランスの適切さ



注)「あまり適切ではないと思う」および「全く適切ではないと思う」、無回答の割合はグラフから省略した。

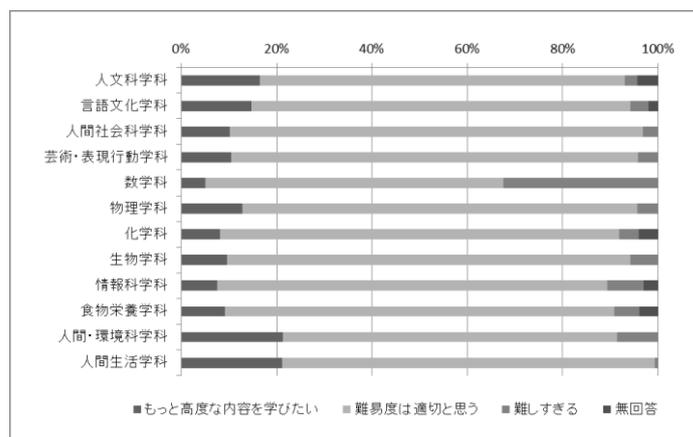
専攻領域における必修科目、選択必修科目、選択科目のバランスが悪いと回答した者に、どの点がバランスを欠いているかについて尋ねた。文教育学部では「必修科目が少ない」が 29.7%、理学部と生活科学部では「必修科目が多い」がそれぞれ 26.9%、23.1%と多かった。

図表 2-9 バランスを欠いている点について

	N	必修科目が多い	必修科目が少ない	選択必修が多い	選択必修が少ない	選択科目が多い	選択科目が少ない	その他	無回答	計
文教育学部	101	12.9%	29.7%	8.9%	10.9%	5.0%	9.9%	7.9%	14.9%	100.0%
理学部	52	26.9%	7.7%	7.7%	15.4%	5.8%	3.8%	11.5%	21.2%	100.0%
生活科学部	78	23.1%	14.1%	11.5%	6.4%	1.3%	9.0%	14.1%	20.5%	100.0%

専攻科目の難易度については、いずれの学科でも「難易度は適切と思う」と回答する割合が最も高かった。学科間で比べると、人間・環境科学科、人間生活学科で「もっと高度な内容を学びたい」と回答する割合が高く、数学科で「難しすぎる」と回答する割合が高かった。前回調査(2007年度)では、生活科学部で「もっと高度な内容を学びたい」と回答する者が 9.3% (無回答は含まれていない)だったが、今回調査では生活科学部平均で 17.8%まで増えている。

図表 2-10 専攻科目の難易度

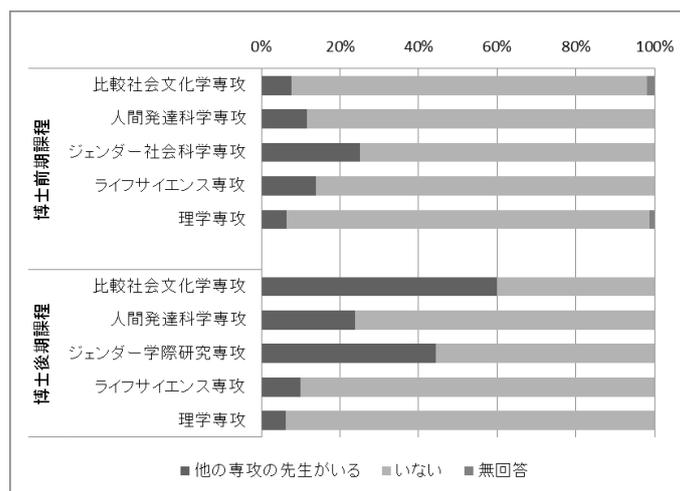


## 2. 大学院教育

### 1) 他専攻の教員の研究指導

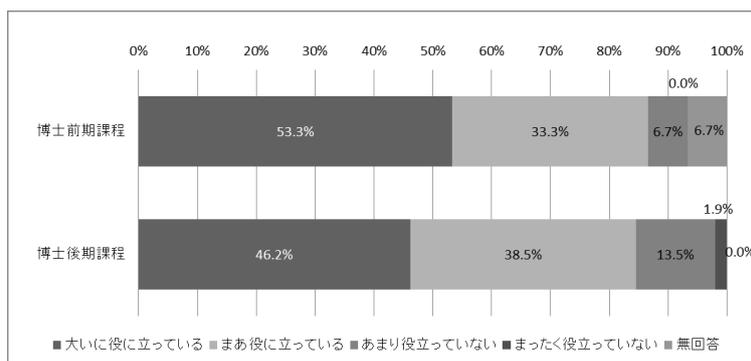
研究指導を受けている教員の中に（主指導以外の副指導教員の先生やその他の先生）、他専攻の教員がいるかどうかを尋ねた。博士前期課程全体では 10.8%、博士後期課程全体では 36.4%が他専攻の教員がいると回答した。とくに、博士後期課程の比較社会文化学専攻、ジェンダー学際研究専攻で他専攻の教員がいる割合が高かった。

図表 2-11 研究指導を受けている他専攻の教員の有無



上記の質問で「他の専攻の先生がいる」と回答した者に、他専攻の教員の指導によって、専門領域以外の知識や研究方法論が研究に役立ったかどうかを尋ねた。博士前期課程、博士後期課程ともにおよそ 85%が役に立っていると回答している。

図表 2-12 他専攻の教員が指導する意義



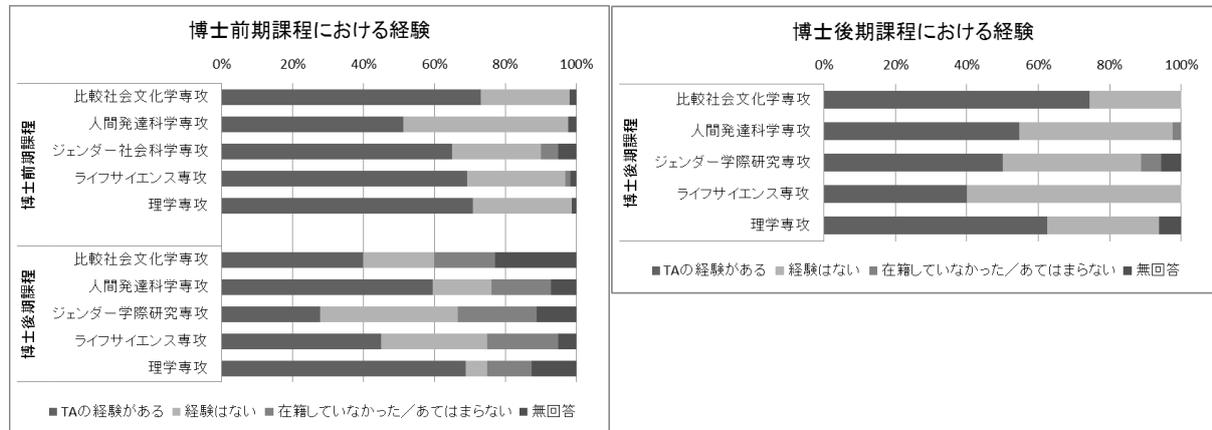
### 2) TA 経験とその意義

つぎに、お茶の水女子大学での TA の経験の有無と、その経験が将来、大学院修了後、大学や企業等における教育や研究指導の指導実践に役立つと思うかどうかについて尋ねた。まず、博士前期課程における TA 経験については、前期課程の学生のうち 66.9%、後期課程の学生のうち 49.7%が経験があると答えた。専攻間で比較すると、博士前期課程の人間発達科学専攻で経験があると回答した者の割合が若干低かった。博士後期課程では 6 割が経験があると回答した。

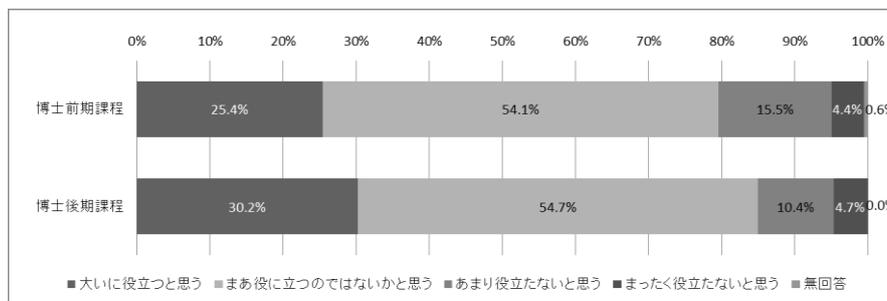
それでは、TA 経験の意義について学生はどのように感じているだろうか。博士前期課程においては 79.5%が「大いに役立つと思う」あるいは「まあ役立つのではないかと思う」と回答し、後期課程で

はその割合は若干高く、およそ 84.9%が役立つと思うと回答している。

図表 2-13 お茶大での TA 経験



図表 2-14 お茶大での TA 経験は将来的に役立つと思うか(大学院)



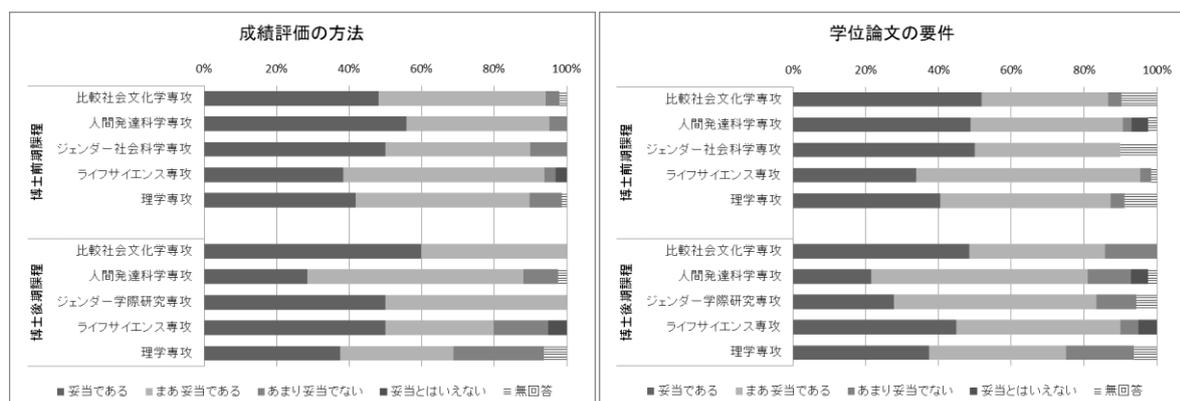
### 3) 成績と学位論文

大学院における成績評価と学位論文要件の妥当性について、前回調査では両方をまとめてその妥当性について質問したが、今回調査では別々に項目を立てて質問した。

成績評価について見ると博士前期課程、博士後期課程ともにおよそ 9 割が妥当であると回答している。学部別に見ると、博士後期課程の理学専攻とライフサイエンス専攻において妥当ではないと回答した割合が高い。

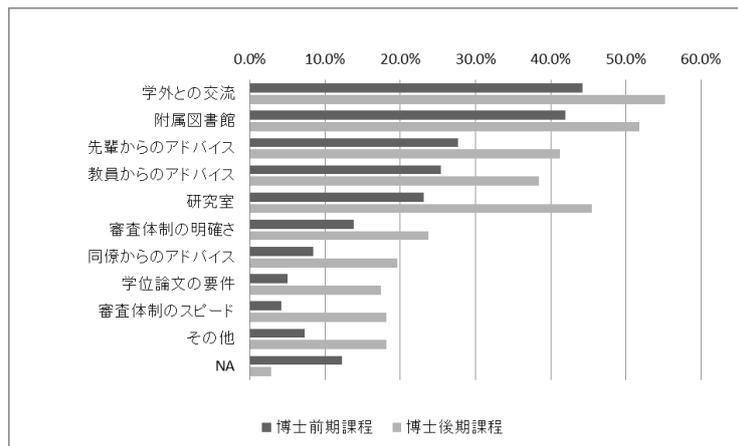
学位論文の要件については、博士前期課程では 9 割が妥当であると回答しているが、博士後期課程では妥当であると回答した者の割合が 82%と比較的低くなっている。

図表 2-15 大学院における成績評価と学位論文要件の妥当性評価



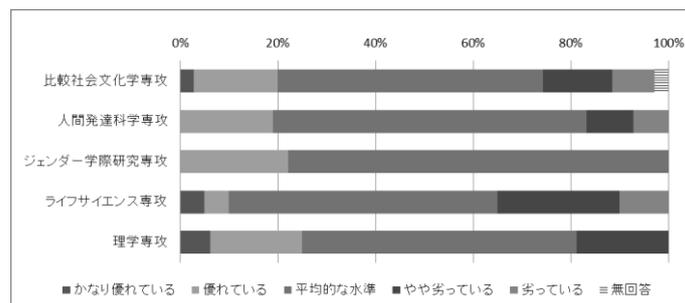
学位を得る上で不足に感じているもの、問題だと感じているものを挙げてもらったところ、博士前期課程では学外との交流と附属図書館を4割が選んだ。博士後期課程でも同様に学外との交流と附属図書館を5割が選び、さらに、研究室を4.5割が選択、また、先輩からのアドバイスと教員からのアドバイスもおおよそ4割が選んだ。その他の意見として、ロッカーや個人の机の不足や利用時間の制限、PC環境の悪さといった研究環境の問題や研究費や経済的支援の問題、博士論文取得や投稿論文提出までの筋道が分からない、教員からの指導の不足、学生同士の学術的交流の少なさ、契約している電子ジャーナルの少なさ、事務手続きの不明確さといった問題が挙げられた（具体的には付表6を参照のこと）。

図表 2-16 学位を得る上で不足に感じているもの、問題だと感じているもの(多項選択)



博士後期課程の学生に自身の研究領域の水準に照らして自らの修士論文のレベルについて評価してもらったところ、全体としては2%が「かなり優れている」、17.5%が「優れている」、59.4%が「平均的な水準」、13.3%が「やや劣っている」、6.3%が「劣っている」と回答した。前回調査では「平均的な水準」と回答した者が63.4%、「やや劣っている」と回答した者が16.6%いた（前回調査には「劣っている」という選択肢はない）。専攻別に見ると、ライフサイエンス専攻で「やや劣っている」あるいは「劣っている」と回答した者の割合が比較的高かった。

図表 2-17 修士論文レベル(博士後期課程)

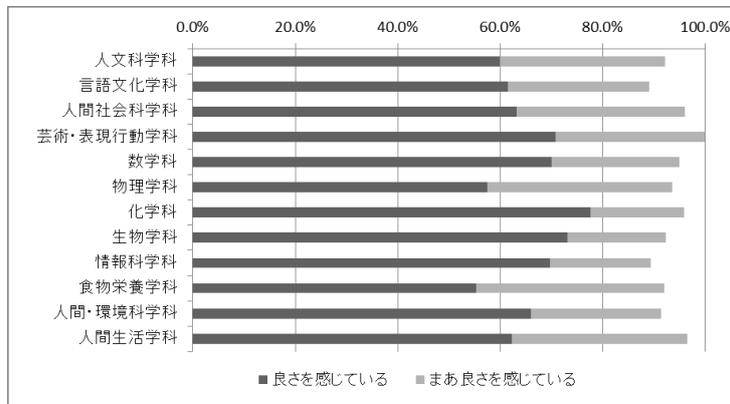


### 3. 少人数教育への評価

お茶の水女子大学は少人数教育を特色としているが、学生はそれをどのように評価しているだろうか。学部、博士前期課程では9割以上、博士後期課程では8割以上が「良さを感じている」または「まあ良さを感じている」と回答しており、多くが少人数教育を支持している。図表2-18、19は学科別、専攻別にその評価を見たものである。これを見ると、とくに理学部の化学科、生物学科、情報科学科、

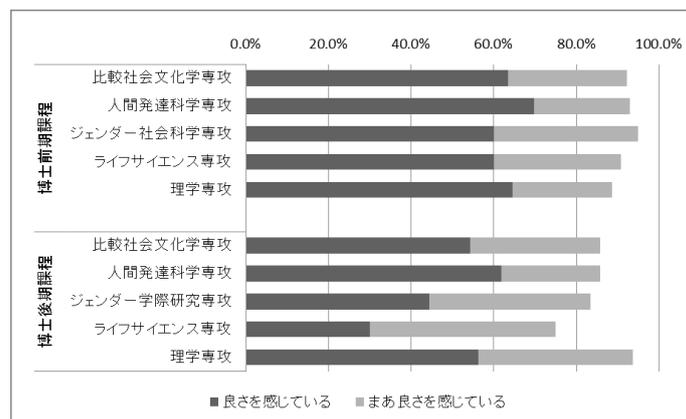
数学科と文教育学部の芸術・表現行動学科で「良さを感じている」と回答する者の割合が高い。博士後期課程でもとくに理学専攻において少人数教育を支持する割合が高い。

図表 2-18 少人数教育のよさ(学部)



注)「あまり良さを感じていない」、「まったく良さを感じていない」、無回答の割合はグラフから省略した。

図表 2-19 少人数教育のよさ(大学院)



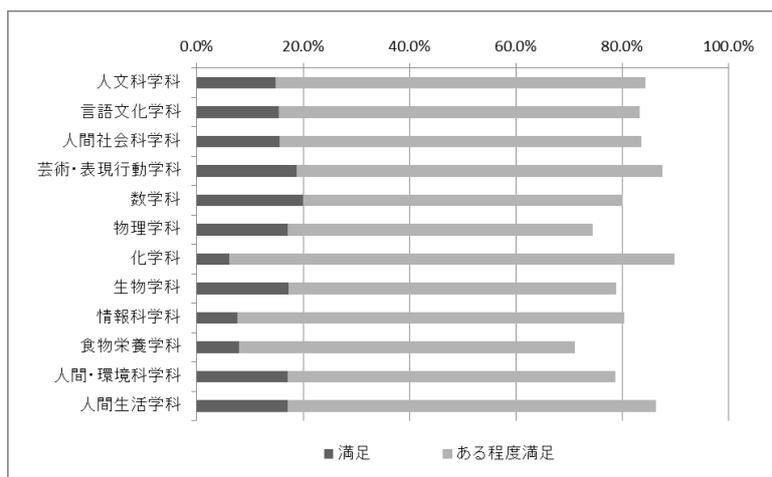
注)「あまり良さを感じていない」および「まったく良さを感じていない」、無回答の割合はグラフから省略した。

#### 4. 教員指導に対する評価

教員指導に対する評価を尋ねた。教養・共通教育（コア、LA など）の教員指導については、全学部で平均 82%が「満足」または「ある程度満足」していると回答している（図表 2-20）。

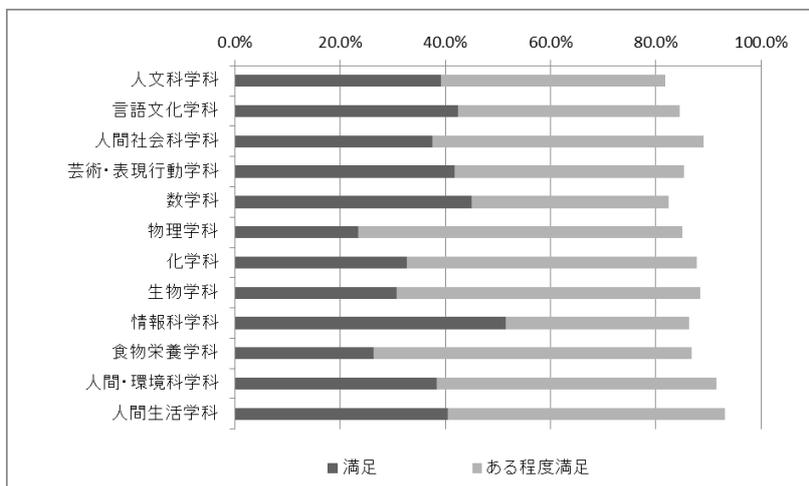
専門教育の教員指導の満足度はより高く、平均して 87%が「満足」または「ある程度満足」と回答している。とくに人間・環境科学科、人間生活学科では 9 割以上が満足していると回答する結果となった。

図表 2-20 全体的な教員指導の満足度(教養・共通教育(コア、LA など))



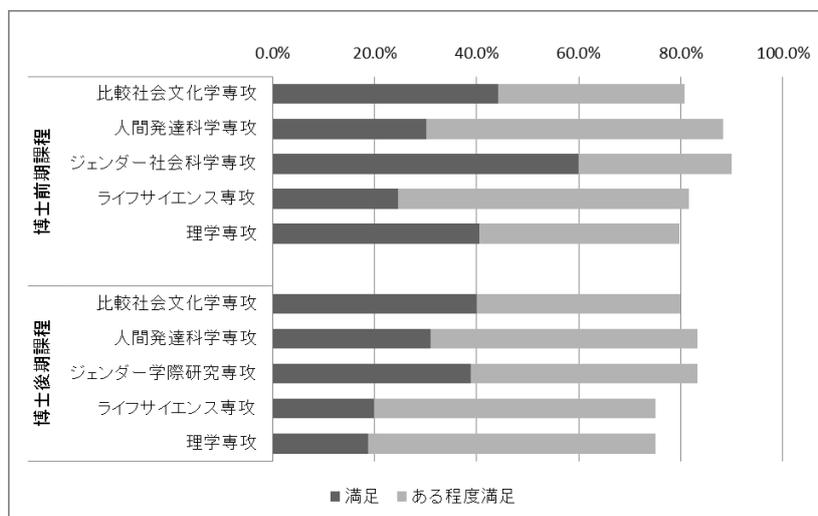
注)「ある程度不満」および「不満」、無回答の割合はグラフから省略した。

図表 2-21 全体的な教員指導の満足度(専門教育)



注)「ある程度不満」および「不満」、無回答の割合はグラフから省略した。

図表 2-22 全体的な教員指導の満足度(大学院)

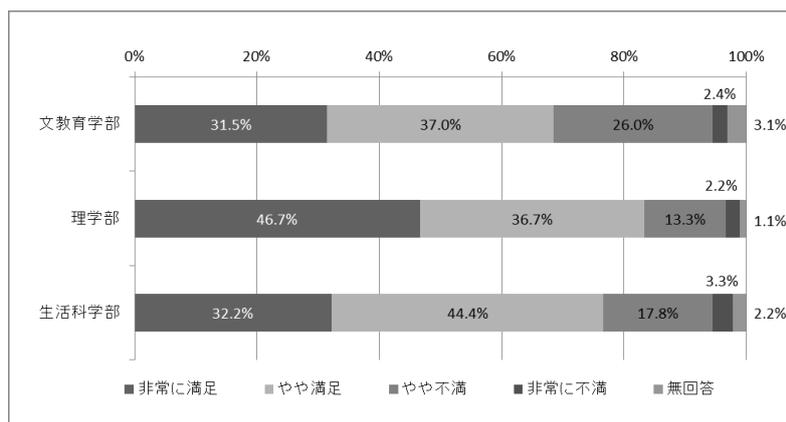


注)「ある程度不満」および「不満」、無回答の割合はグラフから省略した。

一方、大学院では博士前期課程全体で82.7%、博士後期課程全体で80.5%が教員指導に「満足」または「ある程度満足」と回答している（図表2-22）。とくに、博士前期課程の人間発達科学専攻、ジェンダー社会科学専攻でその割合が高かった。

卒業論文または卒業研究の指導に対する評価を4年生に尋ねたところ、「非常に満足」している者が36.2%、「やや満足」している者が39.1%いた。学部ごとに見ると、とくに理学部で満足している者の割合が高く8割以上が満足していた。文教育学部では比較的満足している割合が低く7割未満であった。

図表2-23 卒業論文または卒業研究の指導について(4年生のみ)



## 5. お茶大で身についたこと

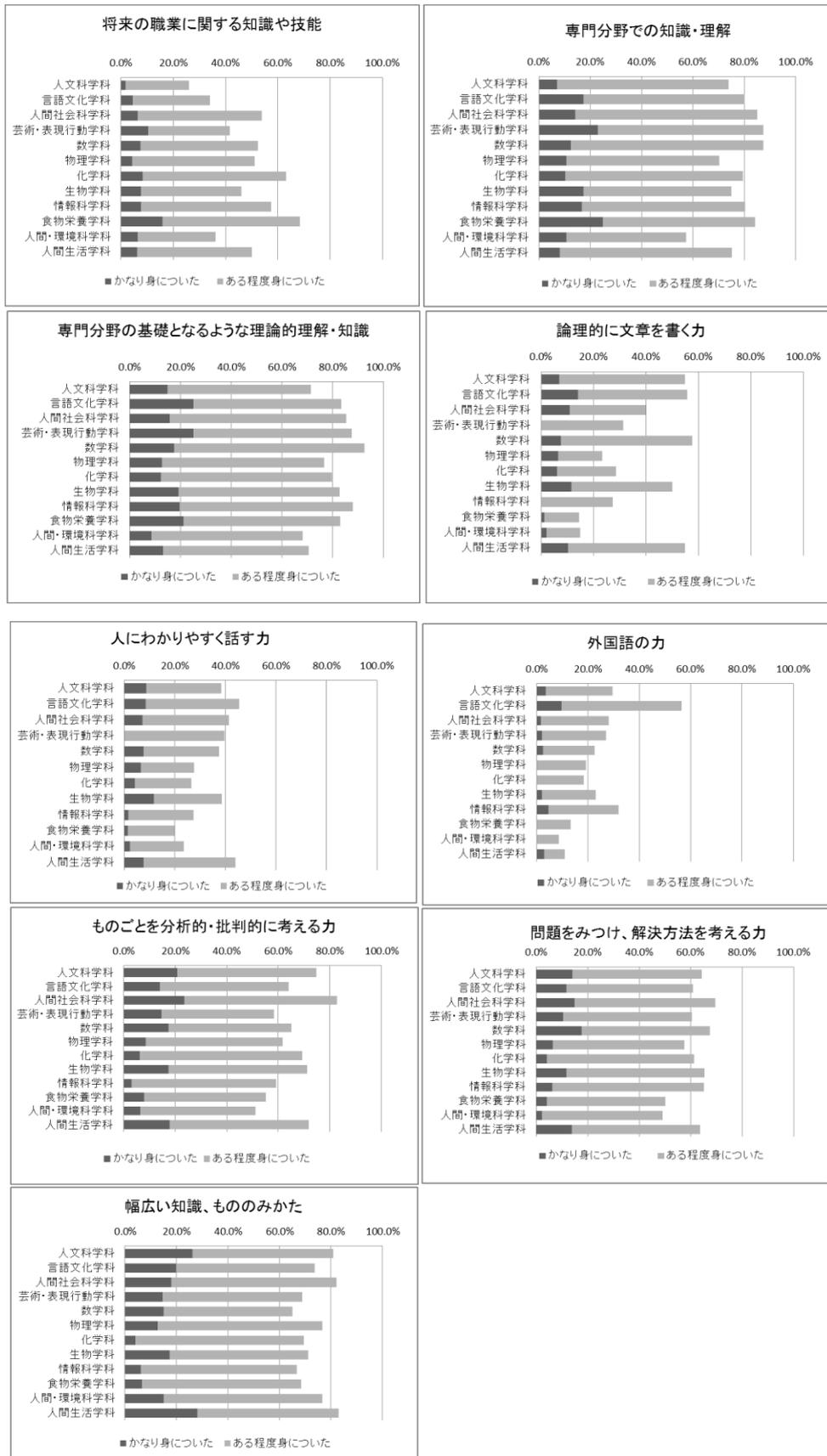
大学生生活全体を通じて「将来の職業に関する知識や技能」、「専門分野での知識・理解」、「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」、「論理的に文章を書く力」、「人にわかりやすく話す力」、「外国語の力」、「ものごとを分析的・批判的に考える力」、「問題をみつけ、解決方法を考える力」、「幅広い知識、もののみかた」がどの程度身についたかを尋ねた。これらの項目は、2007年に全国大学生調査コンソーシアム/東京大学大学経営・政策研究センターが実施した「全国大学生調査」をもとに、質問の方式を変えて聞いた項目である。

「将来の職業に関する知識や技能」について、全体としては46.6%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答している。学科別に見ると、とくに食物栄養学科、化学科、情報科学科でその割合が高い。大学院では博士前期課程全体で61.9%、博士後期課程全体で66.4%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、学部よりも高い割合になっている。

「専門分野での知識・理解」について、全体としては78.4%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、その割合は他の能力と比べても高い。学科別に見ると、人間・環境科学科では57.4%とその割合が若干低い。大学院では、博士前期課程で85.8%、博士後期課程で86.0%が身についたと回答しており、学部よりもその割合が高い。

「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」についても、全体として79.8%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、その割合は「専門分野での知識・理解」と同様に高い。学科別に見ると、人間・環境科学科、人間生活学科、人文科学科でその割合が若干低くなっている。大学院では、博士前期課程で83.9%、博士後期課程で81.1%が身についたと回答した。

図表 2-24 大学生生活全体を通じて身についたこと(学部)



注)「あまり身につけていない」および「全く身につけていない」、無回答の割合はグラフから省略した。

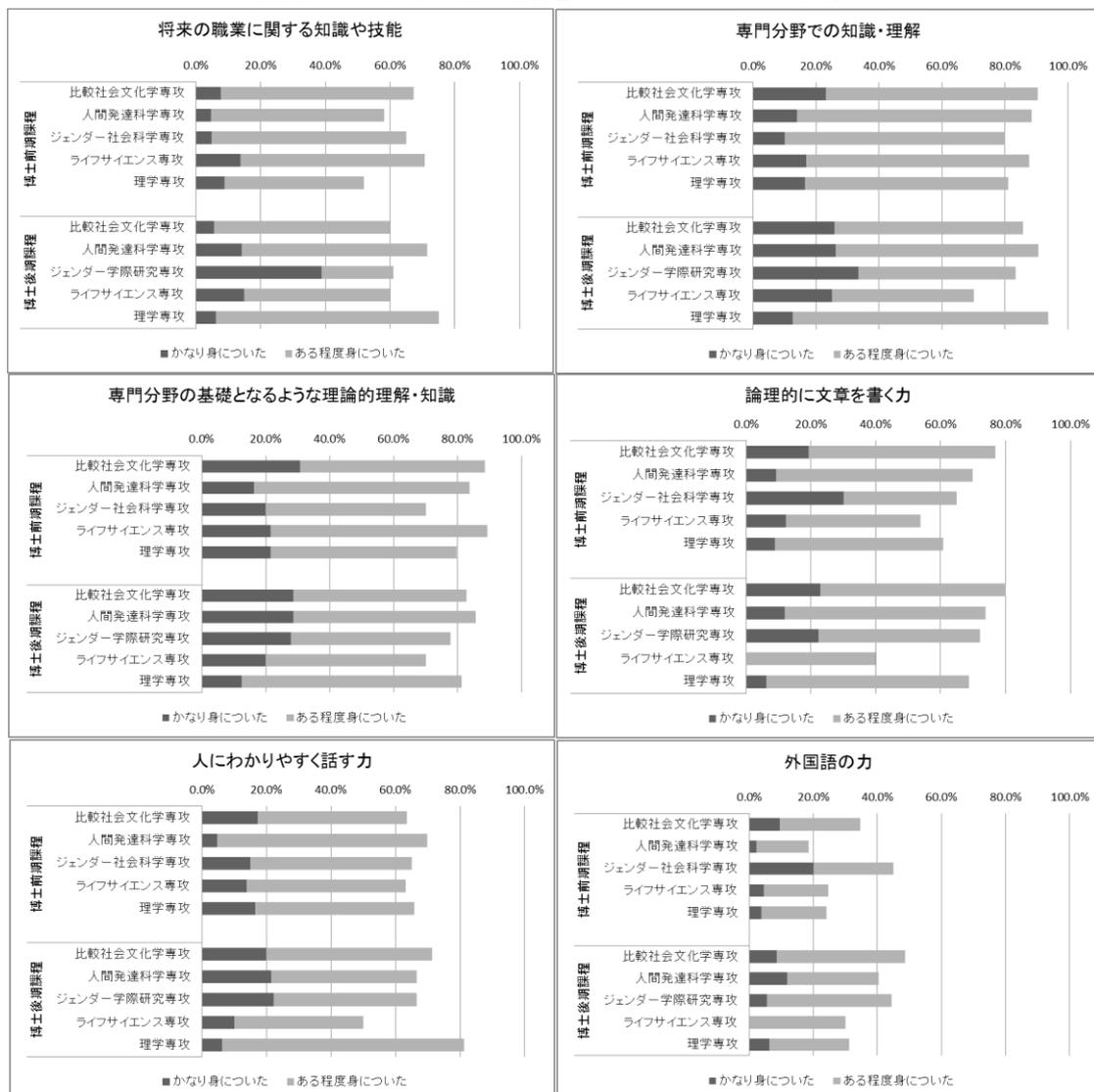
「論理的に文章を書く力」については学科による違いが大きい。人文科学科、言語文化学科、数学科、生物学科、人間生活学科で「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答する割合が5割あるのに対し、食物栄養学科、人間・環境科学科では1.5割にとどまっている。大学院では、博士前期課程で64.3%、博士後期課程で69.2%が身についたと回答している。大学院でも専攻の差が大きく、比較社会文化学専攻でその割合が高く、ライフサイエンス専攻で低い。

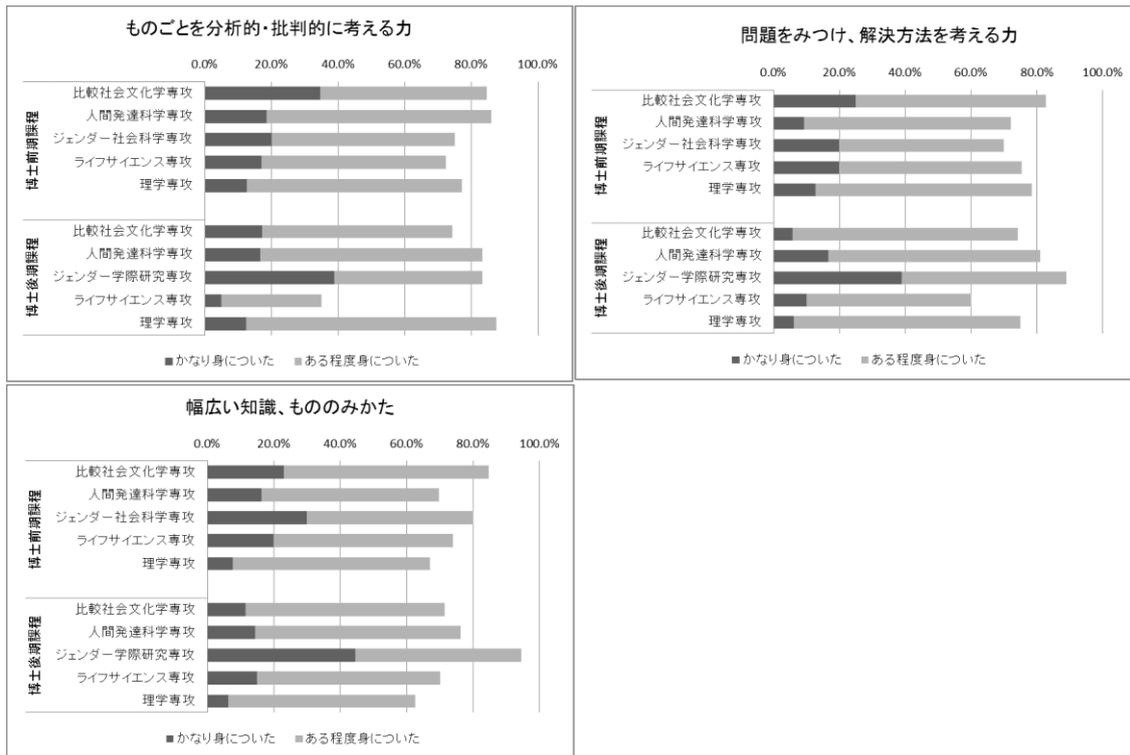
「人にわかりやすく話す力」は全体で36.7%のみが身についたと回答しており、他の項目と比べても低い割合となっている。学科別に比べると、とくに物理学科、化学科、情報科学科、食物栄養学科、人間・環境科学科でその割合が低い。大学院では、博士前期課程で65.3%、博士後期課程で66.5%が身についたと回答し、学部との差が大きい。

「外国語の力」が身についたと回答する割合も低く、言語文化学科のみで56.4%と高い割合を示しているが、全体としては26.9%にとどまっている。大学院博士前期課程もまた学部と同様27.4%のみが身についたと回答している。これに対し、博士後期課程で41.3%が身についたと回答している。

「ものごとを分析的・批判的に考える力」について、全体では67.6%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答している。学科別に見ると、人間社会科学科、人文科学科、人間生活学科で8割を超えている。大学院では博士前期課程で78.8%、博士後期課程で74.8%が身についたと回答している。専攻別に見ると、ライフサイエンス専攻で身についたと回答する者の割合が低い。

図表 2-25 大学生生活全体を通じて身についたこと(大学院)





注)「あまり身につけていない」および「全く身につけていない」、無回答の割合はグラフから省略した。

「問題を見つけ、解決方法を考える力」について、全体では 62.0%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答している。食物栄養学科、人間・環境科学科でその割合が若干低い。大学院では、博士前期課程と博士後期課程でともに 76.9%と学部比べてその割合が高い。とくに、博士前期課程の比較社会文化学専攻、博士後期課程のジェンダー学際研究専攻、人間発達科学専攻でその割合が高い。

「幅広い知識、もののみかた」は 75.4%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、9項目中3番目にその割合多くなっている。「ものごとを分析的・批判的に考える力」と同様、とくに人間社会科学科、人文科学科、人間生活学科でその割合が高い。大学院でも学部と同程度、博士前期課程で 73.8%、博士後期課程で 74.8%が身についたと回答していた。

## 6. お茶大の教育に対する評価

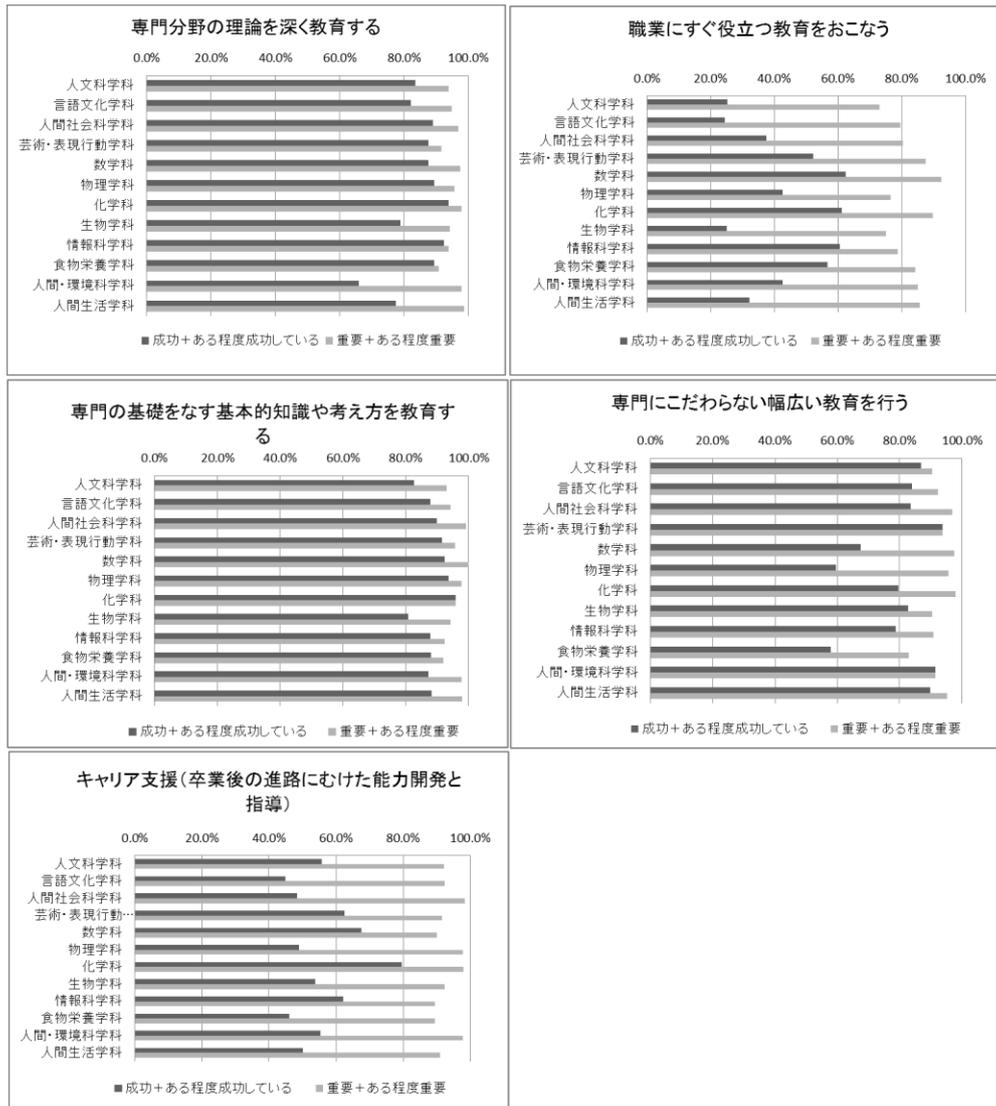
図表 2-26 は「専門分野の理論を深く教育する」、「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」、「専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する」、「専門にこだわらない幅広い教育を行う」、「キャリア支援（卒業後の進路にむけた能力開発と指導）」という点でお茶の水女子大学が成功しているかどうかを尋ねた結果である（濃い横棒）。さらに、以上の点が将来のお茶の水女子大学にとって重要かどうかを尋ねた結果も並べて示した（薄い横棒）。これらの項目は、2007年に全国大学生調査コンソーシアム/東京大学大学経営・政策研究センターが実施した「全国大学生調査」を参照したため、全国調査との比較も試みたい。

「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」以外の項目について、9割以上の学生が将来のお茶大にとって重要であると回答している。「全国大学生調査」でも同様にほとんどの学生がいずれの項目も将来の大学にとって重要であると回答している。「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」については、学科で差があり、将来重要だと回答した割合は人文科学科、物理学科、生物学科、情報科学科で8割未満と低い割合となっている。「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」ことの重要性については博士前期課程/後

期課程ともに9割未満が重要であると回答し、この項目に関してのみ学部と差が見られた。

成功度について見ると、「専門分野の理論を深く教育する」ことが「成功している」または「ある程度成功している」と回答している者の割合は全体で84.2%であるが、人間・環境科学科、人間生活学科、生物学科で相対的に低くなっている。ちなみに「全国大学生調査」では平均が78.1%であった。大学院生については、博士前期課程全体で82.3%、博士後期課程全体で74.8%であり、学部(84.2%)よりもその割合が低い。とくに、ジェンダー社会科学専攻、ジェンダー学際研究専攻でその割合が低くなっている。これは、この専攻が学際的であるという理由によるとも考えられる。

図表 2-26 お茶大の成功度と将来の重要度(学部)



注)「重要ではない」、「成功していない」、無回答の割合はグラフから省略した。

「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」ことが成功していると回答している者の割合は学部全体で38.9%であり、いずれの学科でも成功度は低かった。「全国大学生調査」の62.2%と比較してもかなり低いことが分かる。とくに生物学科、人文科学科、言語文化学科、人間生活学科で2~3割程度となっている。大学院生については、博士前期課程で43.1%、博士後期課程で47.6%が成功していると回答している。とくに、博士前期課程のジェンダー社会科学専攻、博士後期課程のジェンダー学際研究専攻、人間発達科学専攻でその割合が高い。一方、ライフサイエンス専攻の割合は2割強であった。

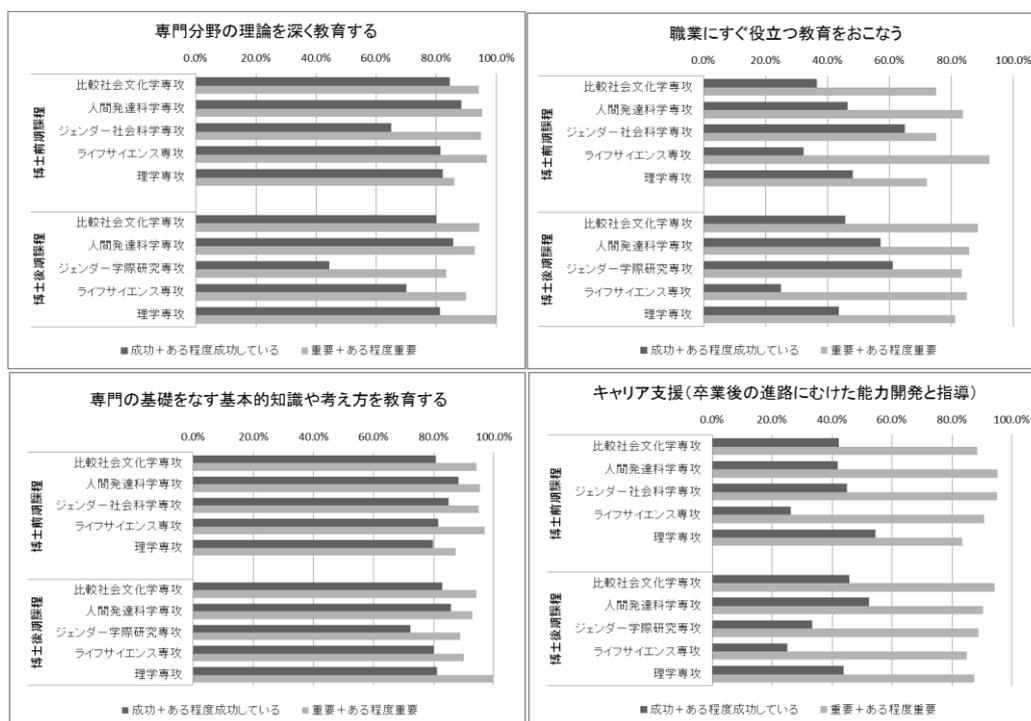
「専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する」については、いずれの学科でも9割の学部生

が成功していると回答している。「全国大学生調査」では82.5%であり、これについてはお茶の水女子大学が全国平均を上回っている。大学院生については、博士前期課程で82.3%、博士後期課程で80.4%であった。

「専門にこだわらない幅広い教育を行う」については、学部全体では81.4%が成功していると回答しているが、数学科、物理学科、食物栄養学科でその割合が低い。これらの学科では専門に力を入れていると考えられるが、一方で、幅広い教育の重要性を説く声が8～9割いることも事実である。ちなみに「全国大学生調査」では74.2%が成功していると回答していた。

「キャリア支援」については成功度と重要度のギャップが最も大きい。成功度については化学学科のみ8割が成功していると回答しているが、その他の学科では5～6割程度のみが成功していると回答している。大学院生については、博士前期課程で42.3%、博士後期課程で39.9%が成功していると回答しており、学部生よりも成功していると考えている者の比率が低かった。

図表 2-27 お茶大の成功度と将来の重要度(大学院)



注)「重要ではない」、「成功していない」、無回答の割合はグラフから省略した。

## 7. 授業への取り組み方(学部)

図表 2-28 は学部生の授業への取り組み方である。「興味がわからない授業でもきちんと出席する」、「なるべく良い成績をとるようにしている」は全体で7割以上の学生が「あてはまる」または「ある程度あてはまる」と回答している。

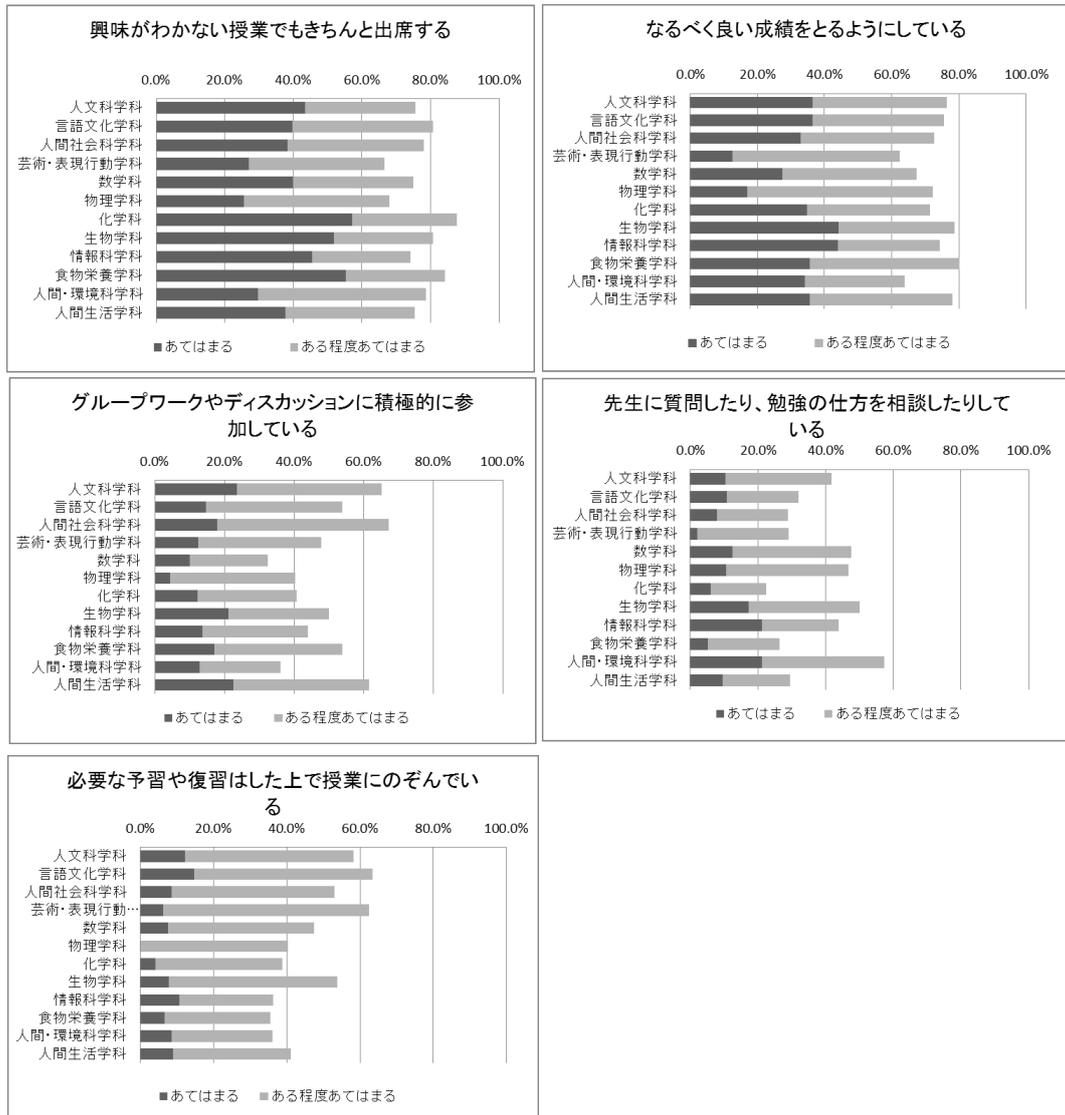
「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」については学科により差があり、人文科学科、人間社会科学科、人間生活学科で6割を超えている一方で、数学科、人間・環境科学科では3割台である。

同様に「先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている」も学科によって差があり、人間・環境科学科、数学科、物理学科、生物学科、情報科学科、人文科学科でその割合が相対的に高い。

「必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる」について、芸術・表現行動学科、言語文化学科で6割があてはまると回答している。つづいて、人文科学科、人間社会科学科、生物学科でその割

合が高い。

図表 2-28 授業への取り組み方(学部)



注)「重要ではない」、「成功していない」、無回答の割合はグラフから省略した。